

String
Fiction Series

4

トリオ・ソナタ



YAMANAKA TOMOTAKA

山中與隆

Duo-Yamanka

トリオ・ソナタ

山中與隆

目次

(三)	(二)	(一)	トリオ・ソナタ
37	11	1	1

(九) (八) (七) (六) (五) (四)

133 *96* *45*
141 *115* *71*

編者あとがき	(十四)	(十三)	(十二)	(十一)	(十)
	230	209	195	186	161

トリオ・ソナタ

作 山中與隆

(一)

1

串本聡子は、最近入ってきた川上満彦に
「弦楽四重奏をしませんか」
と声をかけられてすっかり気をよくしていた。

サイタマ・アマチュア・フィルハーモニー、略してサイフィルのメンバーは弦楽器の奏者たちも管楽器の奏者たちも思い思いに気の合った連中とアンサンブルを楽しんでいる。しかしサイフィルのメンバー全員がどのチームかに属していると言うわけではない。

気の合った者同士がアンサンブルを組んで、合奏を楽しむのにルールも規則もないが、まずそこそこ

に室内楽が楽しめる程度の腕があることが暗黙の条件になる。上手くて、人物的にも人気のある者は当然引く手あまたで、複数のチームに属したりもする。アンサンブルを楽しむ自信がない者や、人づきあい
が苦手な者は、自分には関係ないこととして圏外で無関心を装っている。本当に無関心な者もいるが、自分からは誰かを誘うような勇氣はないが、誰かから声がかかるのを密かに願っている者もいる。聡子

は、このタイプであつた。

聡子の場合、バイオリンの腕前は何とかアンサンブルが楽しめる程度と言えるが、笑顔が極端に少なく、自分から積極的に話しかけると言うことがない。それで、これまでは誰ともアンサンブルを組んでいなかった。言い換えれば、誰からも誘いがかからなかつたのである。

ところが最近関西からこの地に単身赴任してきて

サイフイルに入団したチェロの満彦が、どうしたわけか聡子に四重奏をやらないかと声をかけたのである。聡子は二つ返事で承諾した。聡子にしてみれば声をかけられただけでも嬉しかったし、それだけでなく満彦はかなり弾けるチェロだったのだ。満彦は見かけも魅力的だったので、聡子としては了承以外の返事はありえなかった。ただそのかわりに、まだ入団暦の浅い満彦に代わって、もう一人のバイオリ

ンとビオラを誘ってほしいと頼まれたのだった。

聡子が満彦と何やら楽しそうに話しているのを見た伊集院瑛子が、

「聡子、新しいチエロの人と何話してたの」と訊いてきた。普段特に仲の良い瑛子ではなかった。聡子は意外だった。聡子は自分だけの考えで頼まれた人選を進めたいと思っていた。しかし、そ

のとき聡子は少し得意な気持ちだったの、

「四重奏組まないかって誘われたの」

「うわっ、いいな。ほかに誰と誰なの？」

「いや、それはまだ、これから。わたしがメンバー
集め頼まれたの」

「じゃ、私も入れて」

「瑛子、誰ともしてなかったの？」

「そうなのよ、私なんかでも大丈夫かしら？」

「瑛子みたいにかわいくて上手な人がどうして誘われてないのかしら？」

「知らないわ。私でもいいかチェロの人に訊いてみて」

「いいわよ。私人選を任されたの。じゃあとはビオラね」

「ビオラならたくさんいるじゃない」

と言われた聡子は、即座に防衛線を張った。

「ええ、ちよつと吉田君に打診してるとこなの」
サイフィルのビオラパートには女性メンバーが多く
いて、誘いに応じそうなのが何人もいる。しかし聡
子としては、自分以外の女性を入れたくなかった。
瑛子も計算外だったのだ。その上ビオラまで女性に
なったのではたまらない。そういうことでビオラパ
ートでは唯一の男性である吉田に声をかけようと思
っていたのだが、実際にはまだ声をかけていなかっ

た。

ぐずぐずしていると瑛子が誰か女のビオラに声をかけてしまいかもしれないと思つた聡子は、その日の夜吉田に電話した。吉田は仕事が忙しいなどと言つて承諾したのかしないのかはつきりしない態度だったが、聡子は了承されたものと思つた。それで、メンバー集めが済んだことを満彦に電話で報告した。満彦は早速初顔合わせの日を聡子と相談して決めた。

聡子は瑛子の都合は確認できたが、吉田の方は相変
わらず曖昧な返事しか得られなかった。

練習場所は満彦の家だ。

(二)

約束の日、聡子と瑛子は聡子の車で満彦の家を訪
ねた。瑛子も普段は自分の車で動いていたが、この

日は満彦の家の駐車場事情がはつきりしなかつたために車を一台にしたのだった。

応接間に二人が通されると、そこには既に譜面台が四本立てあり、もちろん四脚の椅子も用意されていた。

「すごい。譜面台もいらなかつたんだ」
瑛子が感心したように言った。

「これからは、譜面台持つてこなくてもいいですよ」

満彦が瑛子に向つて言った。聡子も同じことを言おうとしたのに先を越された感じであつた。

「川上さんは、どちらから来られたのですかと瑛子が訊いた。

「入団の挨拶でも言つたと思うけど、西宮からです。子供の学校があるので家族は向こうにいます。単身赴任ですよ」

「そういえば挨拶で言つてらしたわね。西宮のオ―

ケストラに入っていたって。思い出したわ」
瑛子と満彦の会話が続く。

「アマオケはこの近くにもう一つありますよね。どちらに入るか迷って、あちらにも見学にいったのですよ」

「こつちの方が良かったのね」

「それはよくわからなかったけど、次の演奏会の曲目で決めました。僕は『新世界』が大好きなのでね」

「たしか、あちらはラフマニノフの《二番》とか言
つてませんでした」

「そうなんですよ。ラフマニノフの《二番》と言つ
ても有名なピアノ協奏曲じゃなくて、交響曲の方ね」
聡子は、地元にもう一つアマチュアのオーケストラ
があることは当然知っていたが、そこが何の曲をす
るかまでは知らなかった。

そのとき聡子の携帯が鳴った。

「……残念だけど仕方ないわね。じゃ、次回の
日が決まったら連絡するからよろしくお願いしま
す」

電話を切ると、聡子は瑛子と満彦に言った。

「誘っていたビオラの吉田さん、今日急用ができて
こられないんだって。何か急に仕事が入ったとか
で……最初の集まりなのにごめんなさい」

「仕方ないですよ。串本さんにはメンバー集めをす

っかり頼ってしまつて、でも伊集院さんはこうして来てくれたのだし、吉田さんも基本的には参加してくれるのでしょ。串本さんには感謝ですよ」

満彦は残念な気持ちを隠して、聡子の労をねぎらつた。

「吉田さん、もう少し早めに言ってくれればよかつたのにね。これじゃ今日は解散するしかないわね」と瑛子が言ったが、続けて、

「だけど折角集まったのだから何かしまししょうよ。

川上さんあれ全部楽譜なんでしょ」

そう言つて壁の棚を指差して、

「こういうときのために何かあるんじゃないですか？」

「バイオリン、ビオラ、チェロ一本ずつの弦楽三重奏なら聞いたことあるけど、バイオリン二本とチェロなんて聞いたことないわ」

と聡子。

「世の中には意外とどんな組み合わせの曲もあるものよ。ね、川上さん」

瑛子は満彦に対して馴れ馴れしい。聡子は気に入らなかつたが、そのようにできる瑛子がうらやましくもあつた。

瑛子が言ったような編成の曲を頭の中で手繰つていたのか、満彦は黙つて二人の会話を聞いていたが、

「あるある、《トリオ・ソナタ》って知らない？確か楽譜もあるからやってみようか」

満彦はそう言いながら楽譜棚の前に行って探し始めた。

「《トリオ・ソナタ》か。そう言う題名は聞いたような気がするけど・・・バツハとかそのころの曲ですよね」

「瑛子、詳しいのね」

「そんなことないけど。わたしオーケストラに入っているけど、どちらかと言うともともと室内楽人間なの。といつてもモーツァルトとかベートーヴェンとかドヴォルザークとか誰でも知ってるようなものしか知らないし、自分が弾いたことがあるものなんてほんの限られているけどね。あのー、バイオリン二つとビオラって言うのもドヴォルザークに二曲あるのよね。わたし、むかし遊びでやったことあるわ」

満彦が楽譜を持って戻ってきた。

「あつた、あつた。これ」

そう言つて、二人に楽譜を配ろうとした。

「実はこれ、バイオリン二つじゃなくて、フルートとバイオリンなんだけど、フルートの方が音域が高いので一応ファーストだね。で、どっちがファーストするの？」

「瑛子よね」

「とんでもない、聡子が主になって世話したのだからファーストしたら？」

「じゃ、とりあえずそうして途中で交代してやったら？」

と言う満彦の提案で、まずはファースト・バイオリンを聡子、セカンド・バイオリンを瑛子と決まった。

「知ってるかもしれないけど、これはバッハの『音楽の捧げもの』って言う曲集の中で最も有名な曲で、

四楽章あるのね。初めからやってみようか。まず第一楽章のラールゴからね」

チェロの満彦のリードで始まった。テンポがゆつくりの第一楽章は、三人とも弾けた。満彦は以前にも弾いたことがあったのでもちろん弾けたが、瑛子も弾き進むにしたがつてバツハの素晴らしい音の進行に触発されたように、音楽の中に入り込んだような表情で弾いている。満彦はそのような瑛子の表情を

見て美しい人だと思った。聡子も無難に弾いていたが、瑛子ほどバツハの音楽に感銘を受けながらと言う感じではなかった。第一楽章を弾き終えたとき瑛子が感嘆の声を上げた。

「うわーっ、凄い。CDで聞いたことがある曲だったけど、こんなに弾いていて気持ちが良いとは思わなかった」

「伊集院さん曲に入り込んだみたい弾いていまし

たよね」

と満彦が言うと、

「だって、めっちゃくちや気持ちよかったですもの」
と満足そうに答えた。

「とりあえず次に行こうか。第二楽章も良いですよ」
と満彦が二人を促した。

「はい」

と聡子と瑛子が応じた。しかし聡子が自分の楽譜を

見て、

「えっ、これ難しそう。弾けるかなあ」
と心配そうな声を上げた。

「大丈夫でしょ」
と瑛子。

「でも、ちよつとこれ見てよ。十六分音符のところ
がいつぱいあるし、音域も高い」

「大丈夫、大丈夫。少しゆっくりやってみましょう」

と満彦も後押しする。

最初は瑛子と満彦の二人だけで始まる。十一小節目から聡子が入ってくる。しかし聡子は弾き始めるとすぐにモタモタしだして、十小節も進まないうちに音を上げた。

「これ駄目。瑛子代わって」

「もう少しゆっくりにしようか」

満彦が助け舟を出したが、

「駄目駄目、代わろう」

そう言いながら聡子は席を立って、瑛子の席の後ろに行くのと、瑛子に早く代わってというように背中を押した。瑛子は仕方ないという風に、聡子が座っていた席に移った。

三人はこの第二楽章アレグロをもう一度初めからやり直した。今度は、聡子と満彦で始まる。この部分を聡子は何とか弾き終えたが、交代する前に瑛子

が弾いたようにスムーズではなかった。十一小節目から瑛子が入ってきた。瑛子は問題なく弾き進める。

聡子は弾きながら屈辱感を味わっていた。自分よりかわいくて、自分より上手い瑛子が満彦と調子よくアンサンブルしている。自分も一緒に弾いてはいゝるが明らかに二人よりぎこちなく弾いている。聡子は、何だか瑛子と満彦が自分の存在を無視して二人だけで気持ちよく語り合っているような気がしてき

た。ときどき自分がメロディを弾くところでは、二人はそのぎこちない演奏が通り過ぎるのを待っているようにさえ思えた。

途中何度か場所がわからなくなつて止つた。満彦が

「落ちた。ご免」

と言つて止つたところもあつたが、たいていは聡子が原因であつた。満彦も瑛子も聡子を責めたりはし

なかつたが、聡子は自分がひとりペースを乱していると思つた。

アンダンテの第三楽章はゆつくりの曲なのだが、休符の入つた途切れ途切れのリズムで譜割を読みきれずに止つてしまつた。聡子も迷つた一人だが、この部分では瑛子も戸惑つた。さらに聡子は長い音符のあと細かい三十二分音符が続くところで拍におさまるように弾けずになつてしまつた。

第四樂章、八分の六拍子のアレグロは三人とも上手くいかなかった。それで倍くらいゆっくりにして何とかおしまひまで行つた。そこで終わりにしようかと言うことになつたが、瑛子が、バツハらしい音の動きが素晴らしかつたからもう一度やりたいと言つたので、第一樂章を繰り返した。二度目だつたので聡子も最初るときよりも落ち着いて弾いた。しかし瑛子はさらに素晴らしく音楽的に弾いた。それを

聞いて満彦もつられてすっかり気持ちを入れ込んで弾いた。

ビオラ無しになつてしまつた第一回目の弦楽四重奏の練習会は、三時間予定していたのに二時間少々で終わることになつた。三人は満彦が用意したインスタントコーヒーを飲みながらこれからのことを話し合つた。

「吉田さんは、次回は来てくれるだろうね。日程の

調整と連絡を、また串本さんお願いできますか？」

「もちろん。今日は吉田さんのこと、確認できてなくて済みませんでした。今度はちゃんと念を押しますね」

「お願いします」

と瑛子が言った。そして、

「でもあの人、何となくはつきりしないところがあるのよね」

と続けた。

「でも、他の人探すからあなたはもういいですよ、とは言えないでしょ」と聡子が反論した。

「それもそうよね。都合がつきにくいのだったら初めから辞退すべきなのよね」

聡子は瑛子の言葉に、自分が責められているような気持ちになった。

「とにかく次回ちゃんと来てくれれば問題ないわよね」

「次回に期待しましょう」

と満彦が二人の何となく尖った議論に終止符を打つた。

(三)

満彦の家を辞した車の中で瑛子が言った。

「聡子、吉田さんが村田さんたちともやっているの知ってる？」

村田と言うのは、サイファイルでセカンド・バイオリーのトップをしている女性である。

「いや、知らないけど」

「わたしも詳しいことは知らないけど、村田さんに聞いたことあるの。ビオラが休むことが多いから、

なかなか全員が揃わないって言ってたよ」

「へーっ、村田さんのチームでも同じことになって
いるのか」

聡子は、この人選には問題があったのだらうかと思
った。

「瑛子はビオラ、誰がいいと思ってたの？」

「特にないけど。まあ、とにかく吉田さんに次回を
期待しましょう」

「それより、四重奏するときこんどから瑛子ファーストしてね」

「曲によつて交代ですればいいじゃない」

「やっぱり、わたしじゃ皆さんに迷惑かけるから」

「楽しむためにやるわけだから、あんまり気にしなくてもいいと思うよ」

「うーん、やっぱり基本的にはわたしセカンドするわ」

聡子は自分にも言い聞かせるように言った。瑛子はそれには答えないで、

「川上さんて、単身赴任なのに大きな家に住んでるのね。しかも楽譜なんていっぱい持って来ているしね」

「会社の借り上げ社宅らしいわよ。きっと音楽は川上さんの大きな趣味なのね」

「聡子、詳しいのね」

「そんなことないけど。いずれご家族が来て、一緒に住まれるらしいの」

「やっぱり、川上情報はバツチリね」

「そんなことないって」

「そんなにむきになって否定しなくたって」

「むきになんかなってないわよ」

「あの人、かつこ良いからね」

「だから、そんなことないって。それより瑛子、川

上さんのことかっこいいと思ってるんだ」

「かっこいいじゃない。若いのに仕事が出来て、チエロが弾けて、優しくて。あなたそう思わないの？」

「べつに」

「ふーん」

「『ふーん』で、だって妻子があるのに、そんなこと言っても関係ないでしょ」

「四重奏するにしても、かっこ悪い人とするより、

かつこいい方がいいじゃない。それにいざとなつたら妻子なんか関係ないしね」

「怖いこと言うのね」

「そうね。わたし怖い女かもね」

聡子は、本当に怖い人物を仲間にしてしまったと思つた。きよようの練習ですでに瑛子と満彦はバツハで意気投合していた。その上吉田が駄目になつて、誰か別の女の子が入ってきたりしたら大変だと思つた。

サイファイルにはかわいい女の子のビオラが何人もいるのだった。

聡子は、その夜吉田に電話して次の日を相談した。吉田が大丈夫だという日を、満彦と瑛子に連絡して、次回の練習日が決まった。

(四)

聡子が満彦の家に着くと、満彦の車の後ろに瑛子の洒落た車が止っていた。満彦のことをかつこいとい言っていた瑛子が先に来ていることに聡子は、やや不愉快な気分になった。聡子は隣の空き地に車を止めた。吉田にもこの空き地に車を止めるように教えてあった。

聡子は急いだ。何となく瑛子と満彦がいい感じになっっていることを想像してしまった。ベルを鳴らす

と、満彦が直ぐに返事をしながら出てきて、玄関の
中から

「開いてまーす」

と声がした。聡子が玄関の引き戸を開けて入ろうと
したとき、後ろから

「こんにちは」

と吉田の低い声がした。全員が無事揃ったことで、
聡子はほっとした。

部屋に入ると、瑛子が真つ赤なケースから楽器を取り出していた。

「前はドタキャンしてすみませんでした」などと吉田は満彦と挨拶を交わしている。この雰囲気なら吉田で大丈夫そうだと聡子は思った。

「何かしますか？」

満彦が吉田のほうを向いて聞いた。吉田が答える前

に、瑛子が《不協和音》と声を上げた。この音楽らしからぬ曲名は、序奏の部分で意味深長な不協和音が使つてあることから付けられたあだ名で、モーツアルトの名作として名高い弦楽四重奏曲である。満彦が

「わかった」

と言つて、楽譜棚からモーツアルトの中期以降の弦楽四重奏曲が十曲収められたセットを持ってきて、

みんなに配った。満彦がファースト・バイオリンのパート譜を瑛子に配ったのを見て、聡子はそれでいいのだが、自分にひとことの断りもなくそうしたことにはやや不満であった。そこは瑛子が気を利かせて、「聡子、ファーストやったら」

と言って、配られたファーストの楽譜を聡子の方に差し出した。聡子は、

「いいのいいの、この前車で言ったじゃない。わた

しはセカンドと言うことに決めただしよ」

瑛子は差し出していた楽譜を自分の譜面台に置きなおした。その間、ビオラの吉田は、配られた楽譜の《不協和音》のところを開いて、

「ここ難しいんだよな」

などつつぶやきながら、速いフレーズをさらい始めていた。

「じゃ、やってみましようか」

と満彦が言つて合奏が始まつた。

ゆつくりの序奏のところ、セカンド・バイオリンの
聡子が早くも勘定を間違えてやり直しとなつた。そ
の後、ファースト・バイオリンの瑛子とチェロの満
彦は比較的問題なく弾いていたが、ビオラの吉田が
気にしていた十六分音符の掛け合いのところ、吉田
と聡子が躓いた。躓いたところで止つて、少し前か
らやり直した。しかし全体的に随所で上手くないかな

いところがあつて、何度もやり直しながら第一樂章をおしまいまで弾き終えた。

「やっぱり、前もつてやる曲を決めておいて、少しはさらつてから集まつた方がいいわね」

瑛子が言った。聡子は、瑛子が自分や吉田がいろんなどころで弾けなくなつてしまふのが不満なのだと思つた。

「すみません。みなさん上手だからついていけなく

て」

聡子は、『楽しみでするのだから、気にしなくていいよ』と言つて、ファースト・バイオリンさえも交代でしようと言つたくせに、とここでも瑛子に不満を感じるのだつた。

そんな調子で第四楽章まで全部を弾き終えた。たしかに瑛子が言うように、それぞれがさらつてから集まらないとあまりにも効率が悪い。

「もし皆さんがよかったら次回はこの『不協和音』を中心にやりましようかね」
満彦が提案した。

「賛成」

瑛子が大きな声で同意した。聡子と吉田も何となく同意した。

「みなさん『不協和音』の楽譜お持ちでないでしょ。
今日帰るとき、それぞれ持って帰って『不協和音』

のところを、自分用のコピーをしてくれるとありがたいけど。じゃあ、《不協和音》はこんどさらって来てからまたすることにして、きょう、このあとは何か他の曲しまししょうか」

満彦がそう言って誰かが希望の曲を提案するのを待った。

そのとき吉田がズボンのポケットから携帯電話を取り出した。どこかからかかってきたようだ。吉田

は部屋の隅の方で通話している。

「お世話になります……申し訳ありません……今日ですか……そういうことだったら技術の者も同行したほうがよさそうですね……あつ、わかりました。それではとりあえずわたしがお伺いします。いまからですと現場には五時ころになると思いますが……すみません、では……」

電話を切った吉田が戻ってきて、

「すみません。わたしこれから現場に行くことになったので、今日は失礼させてもらいます」
そう言って急いで楽器を片づけ始めた。

「吉田さん大変ね。休日に、個人の携帯にまで仕事の電話かかってくるのね」

瑛子が言ったが、聡子は折角集まってきた吉田がまたも途中で抜けることになったので、自分の責任のよう感じるのだった。吉田が楽器を片づけ終えて、

立ち上がりながら、

「現場を持ってしている仕事柄、皆さんに迷惑かけてすみません。今の電話も、初めから酷い剣幕だったので『今日には行けません』なんて絶対に言えないんですよ。社員もみんなそうやって対応しているものです。すみません」

吉田がそのまま帰りかけたので、満彦が《不協和音》のビオラの楽譜を渡しながら、次回までにコピーす

るように念を押した。

吉田が帰った後、残された三人はぼんやり座り込んでいた。

「ごめんなさいね。わたしが都合のつきにくい人を連れてきてしまつて」

「まだ二回したただけだから、気にしなくていいですよ」

満彦が聡子を慰めた。

「二回のうち一回の半分だけよね。参加率良いとは
言えないわね」

瑛子の言葉は、いちいち聡子を刺激した。さらに瑛
子は、

「この前やった《トリオ・ソナタ》、またしましよ
うか」

と提案した。

「わたし、あまり弾けなかったから・・・」

と聡子は言葉を濁した。

「練習のつもりでやってみましようよ。またやることがあるかと思ってお二人の楽譜をコピーしておきましたから」

満彦が部屋の隅の台からコピーした楽譜を持ってきた。それはフルートとバイオリンのパートである。自分のチェロパートは前回と同様に元譜を取り出してきた。そして、ファースト・バイオリンのパート

譜を瑛子に、セカンド・バイオリンを聡子に渡した。

「わーすごい。きれいに製本までしてある」

瑛子が渡された楽譜をピラピラめくりながら言った。
「それ差し上げますから、持って帰って気が向いた
とき練習してください」
と満彦。

聡子は、また前回と同じように瑛子と満彦が気分良く弾くのを、躓きながらついていく自分の姿を想像

して気乗りがしなかった。しかし、瑛子と満彦は聡子の気持ちには構わず、楽譜を開いて演奏の体勢に入っている。聡子もしかたなくそれに従った。

《トリオ・ソナタ》の練習はこの日も第一楽章から始まったが、満彦は前回のようにならただ通すのではなく、始まると二小節目で止めて聡子が弾き始めたメロディの歌い方に注文をつけた。

「そのメロディは跳ねるようにはなく、できるだ

「レガートに歌いましょうよ」

聡子が弾き始めたのは、たしかに最初の付点リズムのところを休符があるかのように弾いたのだった。

三人はもう一度初めから弾いた。聡子の付点リズムは、やはりレガートにならない。満彦は再び止めて、五小節目にチェロパートに出てくる同じメロディを弾いて見せた。そして、聡子一人で弾いてみるように促した。やはり最初のソの付点八分音符から六度

上のミの十六分音符に移るときに移弦を伴うためか音が切れてしまう。満彦が、最初のソ、つまり第三弦の三の指と次のミ、つまり第二弦の四の指を同時に押さえてみたらどうだろうとアドバイスした。聡子は満彦にアドバイスを受けることは嫌ではなかったが、そばで瑛子が見ていることに少し屈辱感の混じった気持ちになりながら、満彦のアドバイスどおりにやってみた。たしかに上手くいった。

「よし、それでみんなでもう一度初めから弾いてみよう」

満彦の合図で三人は始めた。弾き始めて直ぐ聡子が、「いまの上手くできなかつたから、もう一回」

と言つて、みんなは初めからやり直した。今度は比較的上手くいったようだった。満彦が、聡子の方を見て

「OK」

と言うように頷いて見せた。三小節目に瑛子が同じメロディを四度高いところで弾き始める。しなやかなレガートで見事に音楽的に弾いた。そして五小節目のチェロの同じメロディも瑛子に負けないくらい音楽的に歌われた。このとき聡子には、満彦に

「OK」

と頷かれた自分の演奏と、後で出てきた瑛子と満彦の演奏が同じように思われた。しかし実際には、聡

子の演奏は付点リズムの最初の二つの音がかなり繋がって弾かれたというだけで、まだ音楽的な動きであつたとは言えなかつた。その違いが瑛子と満彦にははつきりと認識できていたのである。

この日の《トリオ・ソナタ》の練習はこんな調子でゆっくりと進められたので、第一楽章だけで時間になつてしまった。その間聡子への注文が多かつたが、瑛子にも満彦からの注文はあつたし、三人の音程合

わせや、バランスの調整などにも多くの時間が使われた。したがって聡子としても、結果的には自分だけが注文を付けられると言う印象はそれほど受けなかった。

次回は何とか四人揃ってカルテットの練習ができるといいねと言いながら解散した。

(五)

聡子はまた吉田との日程調整に苦勞した。吉田が都合がつくと言う日に他の二人の都合が合わないことがあつて、三度も三人との間の連絡を繰り返してやつと次の日取りが決まつた。普通、こんなことは解散するときになんかで手帳を見ながら決めればなんでもないことなのである。聡子にとっては、吉田

が来なかつたり途中から大急ぎで帰って行つたりした為の余計な作業だった。しかし聡子は自らの存在意義を自覚できることなのでこの作業も忌み嫌つたりはしなかつた。

三回目の練習日、聡子が満彦の家に着くと前回同様瑛子の車が既に停まっていた。聡子は前回よりは早めに来たつもりだったが、それでも瑛子に先を越

されてしまったのだ。早めに来るといっても、満彦の都合もあるだろうからむやみに早くと言うわけにもいかない。瑛子はいったいどれくらい早く来たのだろうか、聡子は気になった。

聡子が練習室に入っていくと、瑛子が一人で指慣らしをしていた。淡い色合いの薄手の生地、短いギヤザーのスカートに下着が透けるようなノースリーブのブラウス姿であった。むっちりとブラウスを持

ち上げた胸元は、女の聡子が見てもセクシーだった。聡子はと言うと、前回までと同じようなジーンズのパンツに地味な色の上っ張りという代わり映えのしない服装で、どんなものを着ていたのかあとから思い出そうとしても、思い出せないタイプの服装である。それに聡子はプロポーションの点でも瑛子にはコンプレックスを抱いていた。背丈は聡子のほうが高かったが、胸もヒップも程よく出ている瑛子に比

べると聡子は細くのつぺりとしていた。

練習室の入り口が開いた。聡子は満彦が入つてくると思つたら、美しい女性が盆にコーヒーカップと菓子容器のようなものに乗せて入つてきた。直ぐ後ろから満彦がポットを提げて入つてきた。満彦が、「家内の梅子です。こちらが串本聡子さん、それからこちらが伊集院瑛子さん。どちらもバイオリンで、吉田さんと言うビオラの人がこれから来られるはず

「だけど」

と紹介した。

聡子と瑛子は立ち上がって、丁寧に一礼した。聡子は、梅子のことを美しい人だと思った。瑛子も美人だが、梅子はさらに美人である。ただしタイプが違ふと聡子は思った。瑛子が周囲にかわいさを振りまくタイプであるのに対して、梅子は静かな美しさを湛えていて、自分の美しさを意識していないような

タイプだと思った。

梅子を交えた四人は、茶を飲みながら吉田を待つことになった。

「奥さんは、ときどきこちらに来られるのですか？」
瑛子が訊いた。

「たまには掃除でもしに来ないとね。でも思ったより綺麗にしているみたいなので安心しました。きつと皆さんのようなお美しい方が来られるから、主人

も張り切って掃除しているのでしょうね」

「そういうわけではないさ。いつも綺麗にしているよ」

「すみません。わたしたちお邪魔するだけで、お掃除くらいして差し上げるべきよね」

瑛子が言うと、

「とんでもない。それより皆さん同じオーケストラなのですか？」

と梅子が話題を変えた。これには聡子が答えた。

「ええ。ビオラの吉田さんも含めて、このカルテツトの四人ともサイタマ・アマチュア・フィルハーモニーというオーケストラのメンバーです。とは言つても、伊集院さんと吉田さんは、もちろんご主人もですが、とてもお上手なのに、わたしだけ下手くそで皆さんの足を引っ張ってばかりいるので心苦しいのですけどね」

「串本さん、そんなことないですよ。みんなドンダリの背比べで似たようなものです。楽しむのが目的でやっているのだから」

と満彦がフオローした。

そのとき玄関でベルが鳴った。みんな吉田がきたと思った。満彦が玄関に出たが、直ぐに戻ってきて宅配便だったと言った。

「それにしても吉田さん遅いわね」

瑛子が言った。聡子は携帯を出して、メールが入っていないかを調べたが、吉田からの連絡は何も来ていないようだ。

「じゃ、また三人で何か弾きましようか」と満彦が言った。

「では、ごゆっくり」

と言つて、梅子は部屋を出て行つた。

満彦は、部屋の隅においてあつたチェロをケースか

ら取り出した。そして、

「今日は『トリオ・ソナタ』の第二楽章でもしまし
ようか」

と言った。

「いいですね。いつそのこと三重奏団にしましよ
うか」

と瑛子。

「吉田さん、今日は必ず行くって言ってたんだけど

なあ」

聡子は、吉田が姿を現さないのが自分の責任のよう
に言った。

「吉田さんがそこまで言ったのだったら、聡子さん
としてはどうしようもないよね」
満彦が聡子を慰めた。

《トリオ・ソナタ》の第二楽章は、第一楽章より
もずっと頻繁に止りながら練習した。小一時間も三

人は夢中になつて練習した。部屋の戸が開いて梅子が、

「いま吉田さんて言う方からお電話で、『今日は急に仕事が入ったので、申し訳ないけど練習には行けない』って、言つてこられました」と伝えに来た。

『今日は』じゃなくて『今日も』だよね」
瑛子がうんざりしたように言った。

「あんなに大丈夫って言っていたのに」

聡子は、吉田に対して怒りさえ感じていた。

「やっぱり三重奏団だね」

瑛子は、冗談か本気か判らないような調子で言った。

「しようがない。このまま《トリオ・ソナタ》続けようか？」

満彦の言葉で、三人は第三楽章を練習することにした。第三楽章はアンダンテのゆっくりとした動きの短

い楽章だが、そのゆっくりとした動きを音楽にするのがとても難しい。満彦も自分のメロディのところを、ちよつと待つてと言いながら何度もやり直している。瑛子が比較的それらしく弾いたが、聡子はまったく音楽にならなかつた。たった三十小節しかない短い楽章だが、歯が立たないといった感じである。前二楽章に比べて弾きながらバッハの音楽の素晴らしさを感じることもできなかつた。ただ瑛子は、

「もう一息ね。テンポとか研究して練習してくることにして、いまは次の楽章に進まない？」と提案した。

みんなこの提案に賛成だった。しかし、最後の第四楽章を始めると、今度はその難しさと難航した。テンポを落として何とか最後まで弾いたが、結局これもしつかりさらって来てからまたやろうと言うことになった。

再びテイータイムとなった。

「吉田さん、大丈夫かしらね。たびたびこんな調子だったら、冗談じゃなくて三重奏団になつてしまふわよね」
と瑛子。

「お忙しいと言うことだから責めるわけにはいかな
いけど、弦楽四重奏を楽しもうと言つて始めた会と
しては、ちよつと問題だね」

満彦も三度続いた吉田の欠席や早引きに不満を漏らした。

「こういうのどうかしら。吉田さんはそのままメンバーになつてもらつて、もう一人ビオラを誘うの。吉田さんが出席したときは弦楽五重奏をすることにするのよ。ビオラ二本の五重奏はモーツァルトに良い曲がたくさんあるし、他にもブラームスとかあるでしょ。案外変化があつて良いかもしれないでしょ」

瑛子の新しい提案である。満彦も少し考えてから、
「それも一つの案かも知れないね。串本さんはどう
思う？」

聡子が答えるより前に瑛子が言った。

「わたし、ビオラだったら良い人いるわよ。誘った
ら来てくれそうな人」

遅れて聡子が発言した。

「じゃ、瑛子にお願いしたらどうかしら」

聡子としては、自分が誘った吉田が問題になつていたので、強いことが言えない。

「聡子、山根由香って知ってるでしょ。あの子どうかしら。結構弾けるし、一緒に室内楽の演奏会聞きに行ったことがあるけど、室内楽に詳しそうだったわ」

やはりサイファイルでビオラを弾いている山根由香をもちろん聡子も知っている。ビオラの中でも一二の

弾き手で、しかも一二の美人でもある。聡子は本能的に自分の存在がますます影の薄いものになると感じた。しかし、

「あの人だったら良いかもしれないわね。満彦さんも瑛子さんも室内楽人間のようだから、強力な室内楽団ができそうね」

そう言う聡子の表情は決して喜んでいようには見えなない。ただでも笑顔の少ない聡子の表情は、一層

暗くなつた。そのような聡子の表情を気付いてか、気付かずでか瑛子はどんだん話を進めた。

「わかつた。次るとき連れて来る」と宣言した。そして、

「彼女自分の車で動いているから、ここの場所教えていいですね。隣の空き地なら吉田さんを含めて全員車で来ても大丈夫ですよね」

「車は大丈夫。それで、次回はいつにしますか。ま

た串本さんに何度も何度もみんなに電話連絡させる
のでは申し訳ないから、いまここで決めませんか？」
それが良いということになって、その場の三人の都
合で、二週間後の日曜日の午後が良いということに
なった。

「ちよつと待って、由香に携帯してみるから」
瑛子のコールに、由香が出たらしい。

「あの、実はね、チェロの川上さんで知ってるでし

よ。最近入られた方。いま川上さんのお宅で室内楽してるの。それで誰かビオラを探そうということになって、由香に白羽の矢が立ったというわけ。もちろん参加してくれるわよね。うん、それで由香は再来週の日曜日の午後って大丈夫？・・・そんなもの止めてこっちにしなさいよ。じゃ、決まりね」

有無を言わず誘い込んだという感じである。

「OK。詳しいことは私から説明しときますね。吉

田さんのことも含めて」

瑛子の素早い段取りに、一同は今度こそちやんとビオラの居る弦楽四重奏ができそうだと期待した。

(六)

そして約束の日曜日の午後、聡子が満彦の家に着くとこの日も瑛子の車が停まっていた。それ以外に

は満彦の車が玄関の横にあるだけなので、まだ誰も来ていないらしい。聡子が入ると、練習室の方から賑やかな女性の笑い声が聞こえる。また奥さんが居るのかと思つたが、部屋に入ると瑛子と山根由香が満彦を交えて談笑していた。

満彦によると、奥さんは前回の練習の翌日西宮に帰つたそうだ。まだ小学生の子供が二人いるので、長く家を空けられないのだそうだ。あの日はおばあ

さんにわざわざ来てもらって、子供の面倒を見てもらったということだった。

「これで四重奏ができる体勢になったわけだけど、きょう吉田さんも来るのでしょ？」

瑛子が聡子に聞いた。

「えっ！わたし連絡していないわよ」

「わたしも」

と瑛子。

「まあ、いいか。今日はこの四人でやりましょうよ」
「そうするしかないね」
と満彦。

かくして新たに参加することになったビオラの山根由香を交えた四人で練習をすることになった。もともとビオラとして誘った吉田に誰も連絡をしないままでの、ちよつとおかきな集まりとなつたのだつた。

「『不協和音』ですよ。コピーしてきましたわよ」と瑛子。

「わたしもと聡子。」

「しまった、ビオラの楽譜がないよ」と満彦がすつとんきような声を上げた。

「吉田さんが持って帰ったままだよ。どうしよう」「また吉田さんね」

と瑛子。

「それは、連絡してないのだから彼のせいにはできな
いよ」

と満彦。

「今日は他の曲をしよう。『アメリカ』はどう」
とみんなに聞いた。

みんなが賛成したので、満彦が楽譜棚からその楽譜
を取り出して来て配った。

「曲は知ってるけど、自分が弾くのは初めて」と由香。

「わたしも」と聡子。

「わたしはだいぶ前だけどやったことある。でも久しぶりだから弾けないかも」

瑛子が言うのを聞いて、聡子はまたも一本取られたと思った。

「とにかくやってみよう」

と満彦が言つて始めることになつた。

弦楽四重奏では最もポピュラーな曲と言える『アメリカ』だが、その冒頭は、八分休符のあとフアースト・バイオリンがトレモロを始め、三拍目の裏からセカンド・バイオリンが六度低くトレモロを重ね、さらに四拍目の裏からチェロが入ってくるという譜面を見ていない人にはわからない、ちよつとトリツ

キーな始まり方になっている。さらに一小節間二つのバイオリンのトレモロとチェロの主音の引き延ばしがあつてからビオラのあの有名な主題が始まる。このビオラの主題が始まるまでの各パートの出方が、慣れていないと難しい。予想通りセカンド・バイオリンの聡子がわからないまま適当にトレモロを始めたのでチェロもどう出たら良いのか迷つて、やり直しとなつた。今度は満彦が足で、一、二、三、四と

一小節分予備に数えてから始めたのでみんなは正しく出ることが出来た。しかし十二小節目あたりからの各パートが違った動きをするとところで崩壊した。

「こここのところ、ゆっくり練習してみよう」と満彦。

四人は十二小節目からの四小節間を、倍近いゆっくりした速度で何度か繰り返した。ある程度弾ける者で、この曲を弾いたことがある者ならそれほど苦労

するところではないのだが、特に聡子が苦勞しているようだった。

「山根さん、初めてにしては良い感じで弾いてますね」

満彦が由香に言った。確かに由香は主題をそれらしく音楽的に弾いたし、随所で間違った音は出してはいたが、出入りの込み入ったところでも正しい場所が出てきていた。結局アンサンブルを混乱させたのは

聡子のようだった。聡子はその自覚があつたが、屈辱感をこらえて繰り返し練習に取り組んだ。

『瑛子だって、出る場所は間違わなくても、高い音は相当変な音程で弾いているではないか』聡子は自分を元気付けるように秘かに他人の不備を考えようとした。確かにそれは聡子の思うとおりで、まあまあ音もリズムも外さずに弾いているのはチェロの満彦だけだった。

それでも四人は根気強く曲の最後までがんばった。アンサンブルを楽しんだというより、苦痛に耐えながら第一楽章の終わりまでたどり着いたという感じであつた。最後の音を弾き終えたとき四人とも

「やれやれ」

と言う感じで、しばらくは誰も言葉を発しなかつた。「やっぱり練習してから合わせないとだめね」と瑛子。みんなはそれに同意した。

「じゃ、今日はみなさんこの楽譜を持ち帰ってコピーして、練習してくることにして、今日はもう少し弾きやすいのをしましうか」

満彦が、今度はモーツァルトの初期のカルテット集を配った。満彦の提案で、《ハ長調ケツヘル一五七》を弾くことにした。モーツァルトが十五才くらいで作った曲だが、よくできた曲で特にアマチュアの奏者たちには人気が高い。

これはかなり上手くいった。

『このような曲でアンサンブルに慣れていくのが良い』満彦は弾きながらそう思った。

誰でもまともに弾けない曲と悪戦苦闘するよりは、弾ける曲を合わせるほうが楽しいに決まっている。

その曲が良い曲なら楽しさも大きい。この曲では四人ともがそれなりに楽しむことができた。しかしよく見ると、セカンド・バイオリンがファースト・バ

イオリンの三度下で同じ動きをすることで、聡子はファースト・バイオリンの陰に隠れるように細々と弾いたし、同じような動きを追いかけるように弾くところでは、瑛子と聡子の音楽性の差が目立った。それは聡子とビオラの由香との間でも同様に由香のセンスが目立つのだった。例えばファースト・バイオリンが二分音符と裝飾音を伴った二つの四分音符で第二主題を弾くところでは、セカンド・バイオリ

ンが一小節遅れで、同じリズムの主題を弾く。瑛子が伸び伸びとした音で歌ったあとを受けた聡子は、リズムが止ったような弾き方で従った。音は正しく弾いたので聡子はちゃんとできたと感じていた。このような場合、聡子が瑛子との音楽性の違いを気付いていれば良いのだが、自分も弾けたと感じるところに少し聡子の課題があつた。

このようにして三回目のカルテット練習会も、四

パート揃ったものの、ビオラの吉田抜き会の会となつたのだつた。

聡子は吉田に電話した。この前の日曜日にカルテットの練習をしたこと、そのことを吉田に誰が連絡するのか行き違いがあつて連絡できなかつたことを告げて謝つた。都合が悪いことが多い吉田のほかには山根由香も誘つたこと。五人揃つたときは五重奏を

しようと言うことになったことも話した。それに対して吉田は、その日も都合がつかなかったから気にしないでいいと言った。そして、山根由香が入ったのだったら自分は五重奏をする必要が起きたとき呼んでくれたらいいとも言った。聡子はそのことをみんなに伝えると返事した。

(七)

四回目のカルテットの練習会は前回から二週間後の日曜日の午後だった。聡子はこの日こそ早めに行こうと思つて家を出たが、満彦の家につくと見慣れない車が停まっている。部屋に入ると由香だった。ラフな服装の由香が満彦と楽しそうに話していた。聡子が入っていくと二人の話は止つた。聡子は、二

人が何となくとても近い距離に座って話していると
思った。それはやや不自然な近さだと思った。由香
はなにくわぬ様子で立ち上がると、自分の楽器がケ
ースに入っただま置いてある部屋の隅の方に歩いて
行つた。

「今日は早かったですね」
と満彦が聡子に言った。

「ええ、いつもぎりぎりになるからちよつと早めに

家を出たの。瑛子遅いのね」

「さつき五分か十分遅れるって、電話がありました」
聡子は、吉田の話を瑛子が来てからにするか迷った
が、他に言うこともなかつたので話し始めた。

「じゃあ、山根さんを入れたこのメンバーで固まっ
たということだね」

満彦が、安心したように言った。

「わたし、ピンチヒッターではなくて、レギュラー

メンバーと言うことね。よかった」

由香らしく、解放的な言い方である。

「よし、そういうことなら先週やった『アメリカ』でも始めてようか」

満彦の言葉で、三人は楽器と楽譜を準備し始めた。聡子と由香は約束どおりコピーしてきたといつて、元譜を満彦に返した。そして聡子が、

「吉田さんモーツァルトの楽譜、次のオーケストラ

の練習のときに直接川上さんにお返しするって言うてました」

と言ひ忘れていたことを付け足した。

聡子はコピーした楽譜をすでにきれいに製本していたが、由香はばらばらのままだった。

そとで車のドアが閉まる音がした。少ししてチャイムがなった。ここではみんな一応チャイムを鳴らすのが、家主が応対に出る前にさっさと入ってくる。

これがカルテットが始まって以来の習慣になつていた。満彦一人暮らしの家であることの気安さであつた。練習室に瑛子が

「遅くなりましたー」

と言いながら入ってきた。ジーンズの非常に短いホツトパンツにシロのノースリーブのブラウスであつた。三人は思わずそのいでたちに注目した。満彦は何も言わなかつたが、二人の女性はほとんど同時に、

「なに、そのかつこう」

と言った。瑛子は

「どう？」

というようにポーズを取って見せた。格好良いヒツプと胸がセクシーである。むき出しの足も魅力的である。聡子は満彦が、この瑛子を見てどんな表情をするのか気になった。満彦は何故かあまり瑛子のほうを見ずに、早く準備するように促した。そして自

分はチェロの調弦を始めた。瑛子もコピーしてきたと見えて、元譜を満彦に返した。譜面台に乗せられた瑛子の楽譜は製本されていなかった。

「ごめんなさい。実はコピー忘れてたのでいま来るときにしてきたの。他にもちよつと用事があつて遅くなつただけだ」

「とにかく始めましょう」と満彦がみんなを促した。

この日の『アメリカ』の練習は、前回のようなことはなかった。さすがにそれぞれが自分の楽譜をさらってきたことがよくわかる。休憩を挟んで約三時間の練習で四つの楽章全部に目を通すことができた。もちろん仕上がったというようなものではない。音楽作りはこれからである。このようにみんながある程度さらってきたの練習では、今度は一人ひとりの基本的な技術の差や、音楽性の差が見えてくる。ビ

オラが終始分散和音で伴奏する第二楽章で由香がなかなかのセンスを示した。

由香は技術的には不備なところが少なからずあるが、由香自身その部分の音楽がよくわかるところでは、技術的な未熟さが嘘のように良い感じで弾く。弾けるところをどのように弾くかでその人の音楽性がわかる。

それに比べてかなり練習してきたあとが見える聡

子は、前回とは雲泥の差といえるように正しく弾いたが、表現と言う点では杓子定規で文章の朗読で言えは棒読みしているような感じである。フアースト・バイオリンほど表立っては目立たないセカンド・バイオリンではあるが、彼女が音楽的に弾くかどうかで合奏の質は大幅に変わるのである。極端な言い方をすると、カルテットの良し悪しはセカンド・バイオリンで決まるとまで言うほどである。

この日の練習を終えて、満彦が盆に四つのコーヒーカップと包装されたままのビスケットのようなものを持って運んできた。さらに何かを取りに奥に入る満彦を、

「手伝う」

と言いながら、ホットパンツの瑛子が小走りについていった。あとの二人も立ち上がりかけたが、四人も必要ないだろうと思って、聡子と由香はその場に

残った。聡子は、あの格好の瑛子が満彦と二人だけでいることが気になったが、二人はポットとインスタントコーヒーなどを持って直ぐに帰ってきた。

四人はインスタントコーヒーをすすり、ポロポロと粉を落としながらビスケットを食べた。満彦を含めて若い四人は三時間の練習で腹が減っているのである。途中の休憩もあつたが、そのときは口に何も入れていなかったのである。一箱のビスケットは瞬

く間になくなった。

「じゃあ、今度はこれね」

と言つて、瑛子が自分のかばんから袋入りの駄菓子を出してきた。

「あるのなら、早く出しなさいよ」と由香。

「これ、自分の夜のおやつ用だったの。あんまりみんなの食欲が旺盛なので仕方なく出したのよ」

「瑛子、一人暮らし？」

と由香。

「そうよ、知らなかった？」

「わたしもなの。瑛子どの辺に住んでるんだったつ
け。この前拾ってくれたけど、何処から来たか聞か
なかったよね」

「ずっと郊外の方って、言ったわよ」

「そうだった？」

とりとめののない二人の会話に釘を指すように満彦が、
「ところで、『アメリカ』一曲じゃ、練習に変化がな
さ過ぎるからもう一曲何か決めておかない？」
とみんなに問いかけた。

「そうねえ」

と声は出たものの具体的なアイデアは出ない。

「川上さんは何かやりたいものがあるんじゃないで
すか？」

瑛子が聞いた。

「皆さんは、ベートーヴェンはどうですか？」

「いいですね。《ラズモフスキー》とか。カッコいいですよね」

と瑛子。

「《ラズモフスキー》は三曲ともやりたい曲ですが、その前段階として初期の《一番》か《四番》あたりをしましうか。《一番》でもベートーヴェンらしさ

がいつぱいで充実してますよ」

「それでいきましよう」

満彦と瑛子の会話に聡子はついていけない。由香もその辺のことにはあまり詳しくないらしい。結局満彦と瑛子の二人で、ベートーヴェンの《一番》も練習曲に加えることが決まった。

(八)

こうしてメンバーが固まり、練習曲も決まっ
てカルテットはようやく本格的にスタートした。
カルテットはその後十数回、四人揃った練習を
続けた。瑛子の服装は夏が近づくにしたがって
露出度を増していったが、それはカルテット
の練習には何の関係も及ぼさなかつた。ただ、
回数に数えられない回が一

度あつた。

それは瑛子の思い違いから起きたことだが、満彦のところには瑛子一人がやつて来た。その日満彦は在宅していたが、彼の手帳には、練習日になつていなかった。しかし瑛子の手帳には、『カルテット一時く五時川上邸』と書いてある。満彦はすぐに聡子に電話した。聡子も慌てて手帳を見ているようだったが、彼女の手帳にも練習日にはなつていなかった。結

局瑛子の間違いであることがわかって、その日瑛子はすすごとと帰っていったのだった。このことを聡子は、瑛子は一人で満彦を訪ねたかったためになんと仕組んだ間違いではなかったのかと、内心疑った。

ところで、このカルテットはどうしてかビオラに恵まれない。ようやく定着したと思つたビオラの山

根由香が、急に結婚が決まって九州に行つてしまふことになつたと言うのだ。たびたび練習に集まつていたにもかかわらず由香は結婚のことを誰にも話さなかつた。

由香が言うには、親が持ってきた話で見合いをして、自分も気に入つたのでさつさと仕事を辞めて嫁ぐことにしたのだ。東京の大学を卒業して、東京の会社に勤め、自由に一人暮らしを謳歌しているよう

に見えていた由香だが、意外に堅実な選択に見える。由香の実家は福岡だった。サイファイルでは有志による送別会が賑やかに行われ、カルテットのメンバーも参加した。

その結果カルテットはまたビオラがいなくなってしまうた。とりあえず三人が集まって善後策を話し合った。ふたたび吉田に声をかけるのか、あるいは

他のビオラを探すのか。

サイファイルには他にもある程度弾けるビオラはいるのだが、そのような者たちはすでに誰かとアンサンブルをやっている。誰ともやっていない者の顔ぶれを見ると、みな満彦たちと室内楽を楽しむようなレベルにはいまひとつと言った感じである。三人とも直ぐには良いアイデアも浮かばず、会話が途切れってしまった。

「今日は、また《トリオ・ソナタ》をしましよるか。あれからいろいろ練習したから、みんな少し上達しているかもしれないし」

満彦が提案して、《トリオ・ソナタ》の練習が始まった。この曲は、ほぼ四か月ぶりだった。確かに満彦が言うように、四か月前にこの曲を合わせたときよりもかなりスムーズに進むようになっていた。

「前やったときよりも、この曲面白いと思うわ」

聡子が嬉しそうに言った。

「たしかにそうね。何か前より他の人がやってる音が聞こえるようになったみたい」

瑛子も同意見だ。満彦は彼女たちの反応を嬉しく思った。それは四重奏などをする場合の非常に大切なことだからである。

それにしても、長続きする良いピオラを見つけたいと満彦は思うのだった。この日練習を終えるとき

に、ビオラのこととはみんな考えておくことにしよう
と申し合わせた。

(九)

しかし、ビオラに関しては新しい情報も動きもな
いまま、次の練習日がやって来た。

「きょうも三人だな」

と思ひながら聡子は満彦のところによつて来た。今回も聡子が一番乗りだった。しかも瑛子は急用ができてこられなくなつたと満彦に電話があつたことを知らされた。さすがに四重奏のところは二人ではどうしようもないと聡子は思った。以前瑛子が間違つて一人できたことがあつたのを思い出した。そのときは、玄関先で瑛子はそのまま引き返したと次の練習のときに話していた。この日も聡子は帰ろうとし

た。ところが、

「折角きたのだから、何か二人で出来るものを合わせませんか？」

と言つて満彦は聡子を引き止めた。

「そんなのもあるのですか？」

「無いことないですよ。やってみましょう」

そう言つて、満彦は楽譜棚をあさっていた。カルテットなどの楽譜と違ってなかなか出てこない。めつ

たにしないものなのだろうと聡子は思った。

そして、瑛子一人の時に満彦は今日と同じ提案はしなかったのだろうか。満彦は提案したのに瑛子が断ったのかもしれない。満彦にとっても、あのセクシーでバイオリンも上手い瑛子と二人で合わせたいと思わないはずがないのと思った。聡子は、満彦が楽譜を探している間、いろいろなことを想像した。

「あつた、あつた」

と言いながら満彦は結構何冊か抱えて来た。最初に
聡子に渡されたのはバツハだった。《十五の二声のイ
ンヴェンション　ヴァイオリンとチェロのための》
と英語で書かれた真つ青な表紙の綺麗な楽譜だった。
バツハの《二声のインヴェンション》なら聡子も知
っている。聡子は小学校に上がる前ピアノを習った
ことがあり、《二声のインヴェンション》の中の何曲
かを練習したことがあった。ページを開くと最初の

一曲がまさに練習したことのある曲だった。聡子は嬉しくなった。

「これ知ってます。ピアノでしたことあるから。でもゆっくりしてくださいね」

聞きなれた旋律をまず聡子が弾き始める。それを追いかけるように同じ旋律をチェロの満彦が弾く。途中難しくなつて止つたりもしたが、二人は面白くなつて何度も繰り返して練習した。繰り返すたびに少し

ずつテンポも上げた。一番のあとの曲も順々にやってみた。あまり面白いと感じられない曲や、難しくて上手く進まない曲は飛ばして、先へ進んだ。なにしろ十五曲もあるのだから。

しかし結局何度も繰り返して練習したくなるような、あまり難しくなくてしかも弾いていて面白いと思つたのは、最初の一、二番、長調とイ短調の十二番だった。早く弾けたら面白そうな曲は幾つもあったが、面白

いほど早く弾くのは聡子だけでなく満彦にとつても大変だったので、ゆっくり試し弾きしたただけで

「これは無理だね」

と言つて次に進むのだった。《二声のインヴェンション》で一通り遊ぶだけで四時ころになつていた。二人はかなり夢中で《インヴェンション》の楽譜と取り組んでいたことになる。

《インヴェンション》を十五番まで見終わると満彦

は、

「これもちよつとやってみようか」

と言つて、今度はモーツァルトの ≪二つのデュオ、バイオリンとチェロのための≫と大きくドイツ語で書かれた、今度は真つ赤な表紙の楽譜を聡子に渡した。これは、聡子の知らない曲だった。

「もともとはバイオリンとビオラのために書かれた二重奏だけど、ビオラパートをチェロに書き換えた

版があつたので買っておいだの」

二人は弾き始めたが、聡子はまったく言っていないくらい弾けなかつた。今度は思い切りテンポを落として弾き始めたが、それでもなかなか進まない。さすがに満彦もこれは早々と諦めた。満彦はさらに、棚から探し出してきた楽譜の束の中からコピーしたような白い楽譜を取り出した。それには、表紙はなく目次から始まっていた。目次のまわりの余白には、

バイオリンとチェロを弾いている子供のイラストがあつた。初心者用の二重奏でまるでピアノのバイエルの始めの方の曲のような単純なメロディがバイオリンとチェロの二重奏になっている。これは、聡子も難なく弾いた。ただこのようなものを弾くときにも音楽性は表れるもので、聡子は棒のような音をしばしば出した。さすがにこれらの曲は大人の二人にとって面白くなかつたので、数曲弾いてやめた。

満彦はそれでもさらに、もう一冊コピーされた楽譜を出した。今度はバルトークとある。

「これはバルトークの《四十四の二重奏曲》というバイオリンの二重奏曲を、やっぱりバイオリンとチェロで弾けるようにしたものだけど、いまのやつよりは面白いかも知れないよ」

満彦が説明して、二人はすぐに弾き始めた。音はさつきの子供用と変わらないくらいシンプルだが、リ

ズムと響きが新鮮だ。二人は、一曲一曲は非常に短い曲を、ときどき

「面白いからもう一回やろう」

などと言いながら、次々と弾いていった。最後のページを弾き終えたとき壁の時計は六時を指していた。「少し疲れたね。聡子さん今日はこのあと何か予定があるの？」

このカルテットでは、女性たちはお互いを聡子、瑛

子、由香と名前呼び合っているが、満彦は串本さん、伊集院さん、山根さんと苗字で呼んでいる。ところがいま満彦は聡子さんと言った。聡子はその違いに敏感に気付いた。

「特にはないです。いつものように練習がすんだら家に帰るだけですけど」

「だったら、そこらに行つて一緒に食事しませんか？今日はカルテットもトリオもできなかつたし」

まったく意外な誘いだった。そもそもこのカルテツトの練習会ではみんなと一緒に食事などと言うことはこれまでに一度もなかった。聡子はやや考える時間置いてから返事した。

「ええ、いいですけど、一応家で食事することになっていきますし」

「ああ、そうか。お家で用意されてますよね」

「でも、大丈夫です。ちよつと待ってください」

聡子は部屋の隅に行つて、携帯電話を取り出してかけ始めた。小さな声で、

「あつ、おかあさん？きょうこれからみんなで食事することになったの。いいでしょ？じゃ、あまり遅くならないように帰るから」

と言つて電話を切つた。やはりこういう場合、

「みんなで」

という嘘にしないとまずいのだなと、満彦は思った。

「わるいね。ここから歩いていけるとところに小さいけど美味しい洋食屋があるから、そこに行ってみようと思うのだけどいい？」

『山路』とかいう木の看板がかかっているところで「よし決まりだね。荷物は片づけてこのまま家において、帰ってきたら直ぐに帰れるようにしたらいいよ」

満彦が聡子にここまで親しみを示すのにはそれなりの理由もあつた。聡子は、顔立ちは悪くないのに表情が暗く、笑顔がほとんどない。これはいまでもサイフイルの練習では変わっていない。しかし、カルテットでは少しずつ氷が解けるように明るさと笑顔が出るようになっていたのである。明るく笑顔で話す聡子は、以前の近寄りがたい雰囲気ではない。そのためにかうして満彦も気軽にいろいろと話しか

けられるようになったのである。満彦は解放的に近寄ってくる瑛子や由香の方が聡子より苦手であつた。明るくてかわいくてセクシーでもあり、演奏も上手くて、音楽性もある、室内楽もある程度知っている。どこからみてもより魅力的なはずなのに、満彦にしてみると心の底が見えてしまうような感じがして、その点聡子の心の方が深い湖のような感じがしているのだつた。

聡子は、満彦のこの日の意外づくめの自分に対する態度はとても嬉しかったが、何故なのかわからなかつた。何故あんなに次から次へと禄に弾けもしない自分を相手に二重奏を続けたのか。何故これまでに一度や二度みんなで食事する機会があつても不思議でなかつたのに、二人だけの今日食事なのか。それも満彦のようすは決してお義理で誘っているようには見えない。聡子の最大の疑問は、何故瑛子でな

くて自分なのかと言うことだ。

(十)

洋食屋の『山路』には五分くらいで着いた。人の良さそうなマスターが二人を迎えた。

「きょうは、お友達とご一緒ですね」

満彦はときどきここに来ているようだと聡子は思っ

た。それにいつもは一人で来ているらしい。

「カルテットの仲間ですよ。きょうは集まりが悪くて。埋め合わせですよ」

別に満彦が埋め合わせをしてくれる必要なんかないのにと聡子は思ったが、関係のないマスターの言葉に適当に合わせたのだろう。

二人はメニューを見たが、満彦は決めていたよう
で、

「肉は大丈夫？」

と聡子に聞き、聡子が頷くとウエートレスにステーキダイナーと、聡子が頼んだ。そして、

「聡子さんは車だからアルコール駄目だよね。僕、ビール一杯いい？」

と言つてから、オーダーに生ビールを付け加えた。聡子はしばらくメニューを見ていたが、

「ステーキダイナー、一八四〇円」

と言うのが後ろの方にあつた。結構するんだと聡子は思つた。

薄暗い店内には六、七個のテーブルとカウンター席がある。テーブル席には若いカップルが一组、初老の夫婦だろうか一组と、白髪の紳士と若い女性と言う組み合わせの三組がいて、満彦と聡子のカップルを入れるとかなり席が埋まっている感じになつていた。

初老の夫婦らしいカップルは無言で食べ物を中心に運んでいる。一方年齢的に差があるように見える白髪紳士と若い女性の席には飲み物だけがあつたが、さかんに話が進んでいる。このような店内にしては比較的大きめの声で喋っている。満彦たちの席にも断片的に話が聞こえてくる。言葉使いから推察すると会社の上司と部下のような感じである。若いカップルは静かな声で話し続けている。二人とも笑

顔が絶えないところを見ると、関係が上手くいっていることがわかる。

カウンター席には中年の男性が一人、ときどきマスターと言葉を交わしながら食事をしている。そばには生ビールのジョッキも置いてある。聡子は、満彦も一人でここに来たときは、あのようにして食事しているのだらうと思った。そして、今日はちゃんと相手がいて良かったのかなとも思った。

「川上さんの奥様は月に一回くらいは来られるのですか？」

聡子はカウンター席の男性の方をチラッと見てから言った。そのとき手前の席で、白髪 of 紳士が女性の頬を触るのが視界の隅に入ったが、じろじろ見ることはしなかった。

聡子にしてみれば、カルテットのみんなではなく

自分ひとりが満彦と食事に来たことが気になってい
た。

「いやあ、三月に一回くらいかな。小学生の子供が
二人だから、なかなか家が空けられないのでね」

「あんなお綺麗な奥様がそばにいないのは寂しくな
いですか？」

「子供にかかりつきりでね。一人暮らしも静かでい
いものですよ。それに今日は素敵の人が食事につき

合つてくれたしね」

「瑛子みたいにかわいい人でなくて悪かったですね」

そう言つてから、聡子はひねくれたような言い方が過ぎたと反省した。

「とんでもない」

と言つてから、満彦はそのあとに何か言い足そうとしたが、言うのを辞めた。しばらく間をおいてから、

「最初にカルテットを誘うときに、聡子さんに声をかけたでしよ。僕はこれまでもいろいんな人とカルテットをしてきたけど、カルテットでは人間的な信頼が大切だと言うことを何度も経験してきました。その点であのオーケストラの中では聡子さんがぴつたりかなと思ったのですよ。実際にやってみて、その予測は当たっていましたね」

「でもわたしなんか下手で、とても皆さんのペース

について行けないから」

「上手、下手と言つても今のカルテットの四人はドングリの背比べですよ。やっぱり大事なのは人間的信頼関係ですからね。技術は、プロじゃないのだからやっついていくうちに少しずつ上達したり慣れたりしたら大丈夫ですよ」

「技術は……言つても、限度があるでしょ。きょうわたしは本当に何も弾けないって感じました

わ」

「そんなことないですよ。僕はとつても楽しかったですよ」

「そう言ってもらえると、少しは気が楽になりますけど」

勘定は満彦が払った。聡子は割り勘にしたいと主張したが、それはこの次にとつて満彦に押し切られた。

食事がすむと聡子と満彦は、来たときと同じようにブラブラと歩いて満彦の家に帰った。初夏の宵の空気が快い。聡子は恋人と歩いているような気分を感じていた。満彦も聡子に対する優しい気持ちで、聡子のペースに合わせてるようにゆっくりと歩いた。二人は何時までもこうして歩いていたいような気持ちになつていたが、すぐに満彦の家に着いてしまつた。

聡子はすぐに手洗いを借りてから、自分の荷物を
持って帰ろうとした。

「きょう三人分のおやつを買ってあるんだけど、コ
ーヒー入れるから、よかったら食べてから帰らな
い？」

聡子は楽器と楽譜などを入れた鞆をぶらさげたまま
突っ立って、どうしようかと考えたが、荷物をその
場に置いた。

「コーヒー、わたしが入れましょう」

「じゃあ、ケーキの方をお願いします」

二人は台所に行き、満彦は冷蔵庫から洋菓子の箱を出して聡子に渡した。白い小さな箱には『山路 謹製』とある。

「あ、『山路』のだ」

「そう。あるのは知っていたけど買ったのは初めて。そこの戸棚に皿があるから適当に出して、ケーキを

乗せてください」

聡子は、何度も満彦の家に来ているのに、台所は初めてだった。瑛子と由香は気軽に手伝ったりしていたが、そんな時聡子は一步引いてしまつて、わずかなお茶の準備に三人も必要ないと考えてしまうのだつた。いま初めて見る満彦の台所は、男の一人住まいにしてはとてもきれいに片付いていると思つた。

聡子は食器の音を聞きながら、この広い家に満彦

と自分の二人だけしかいないのだと言うことを、改めて実感するのだった。

聡子はショートケーキを一つずつさらに乗せ、満彦にフオークが何処にあるか聞いて、それに添えた。満彦はその間にインスタントコーヒーを入れた。二人はそれらを持って練習室に戻った。その間聡子は、満彦と自分の間の距離が無くなったような不思議な感じであった。

満彦は、たったそれだけの作業だったが聡子があつても手馴れた様子で家事をこなすと感じた。聡子の正確な年令は知らなかったが、三十代かもしかしたら四十になつてゐるかもしれないと思つていたので、それくらいのことには当たり前とも思つたが、それにしても聡子の台所での所作の一つ一つが実にスムーズだと感じたのだつた。

イチゴのショートケーキを食べながら聡子は、何

か思い切ったように唾を飲み込んでから話し出した。

「おいしい」

と言つて一息ついてから、

「わたし、実はバツイチなの。結婚してから一週間で別れたんです。十五年前のことですけど。きょうはそれ以来初めて、何かしら家庭的な雰囲気を感じてしまいました」

満彦はまったく想像していなかつた聡子の過去だつ

た。このカルテットでは打ち解け始めていたが、聡子の他人を寄せ付けないような心を閉ざした雰囲気はそのためだったのかと思った。いまこうしてすっかり心を許したように打ち解けている聡子を、満彦は美しいと感じた。

「知りませんでした。苦勞されたのですね」
満彦は、『二週間で別れた』と言うのがどういひきさつだったのか知りたかったが訊かなかつた。聡子

は自分から話し出した。

「相手の人に、結婚したときにも女の人がいたんです。父の会社の部下だった人で、父の勧めで少しの期間お付き合いして、父がその人を気に入っていたもので、結婚することになったのだけど、結婚直後にその人が女の人と付き合い続けているらしいことがわかったの。それも父が直接それを知ってしまったので、父は激怒してすぐに別れるということにな

ったのです。わたしは、何が何だかわからないうちに父のペースで、結婚しそして別れたと言うわけ。バカみたいでしょ。いまどきこんな人任せの女なんていけませんよね。まだ学校出たばかりの二十三くらいだったから」

聡子は訊かれもしないのに、これまで誰にも言わなかつた過去を話した。打ち解けた雰囲気で優しくしてくれる満彦に対して安心してきつたのか、これまで

聡子の中に封印されていた過去が、氷が解けるように流れ出したのだった。二人の間に沈黙が流れた。満彦もどう答えたらいいのかわからなかつた。

「すみません。つまらないことをお聞かせしてしまつて。川上さんが優しく聞いてくださるので、つい調子に乗つて喋つてしまいました。わたしの親は、娘に悪いことをしたと思ひ続けているので、家では結婚に関する話のご法度なんです。それにわたし、

世の中の男の人に対して不信感が強かったもので」
聡子は言外に、満彦は違うと言いたそうであつた。
聡子は急に思い立ったように、ケーキの皿とコーヒ
ーカップを持って台所に向つた。満彦は、それらを
流しで洗う聡子の両肩に後ろから手をかけて、
「聡子さんはまだ若いし、魅力的な人だから、自分
にも音楽にも自信を持っていいと思いますよ」
と言つた。聡子は満彦の方に向き直つたので、満彦

はそのまま聡子をそつと抱いた。聡子は満彦の胸に顔をうずめるようにしていたが、ハツと我に返つたように満彦から離れて、

「帰らなくちや」

と言つて、練習室に急いだ。そして聡子はそそくさと荷物を持ち、車まで送つてきた満彦に運転席から軽く会釈しただけで帰つていった。満彦は、生あつたかい夜の空気の中に立ち尽くして、聡子の車の赤

いテールランプが見えなくなるまで見送っていた。

(十一)

ビオラがいなくなつてからしばらくは、トリオの集まりもなかつた。結局バツハの《トリオ・ソナタ》以外にはこれと言つた曲もなく、バツハの曲が仕上がつたわけでもなかつたのだが、何となく集まる動

機がなくなっていたのである。三人は、サイファイルでは顔を合わせていたのだが、誰からも集まろうと声がかかることはなかった。

そのころ満彦は、サイファイルの練習のときにこっそりと聡子とメールアドレスの交換をした。なぜか満彦は、何回も日程を調整しながら練習会を持ったのに、メンバーの誰ともメールアドレスを交わしていなかったのである。と言うより、日程の連絡や調

整はほとんど聡子がやっていたから必要なかったのである。聡子は何の疑問も持たずに、むしろ当然のように満彦とアドレスの交換をした。

お互いのメールアドレスを知ってから初めてのメールは、満彦から聡子に当てたものだった。それはメールアドレスを交わしてから数日してからだった。満彦のメールは、また一緒にこの前のところで食事

したいから何時何時の夜時間が取れないかと言うものだった。指定された日は平日だった。誘われた聡子は、家には勤め先で食事会があるから遅くなると言つて家を出た。

聡子は何の躊躇もなく満彦の誘いに応じたのだった。
「今日は、会社の食事会があるからつて言つてきたの」

「そうか、遅くなるときは家に言わなくてはならんのだね。こつちが一人暮らしなので、つい気軽に誘ってしまつてごめん」

「大丈夫です。わたしはもう三八にもなる会社勤めですからね。家の許可がないと出かけられないと言ふことはありませんの。ただ家で食事するかどうかくらいは言つておかないと」

「でも、すぐに応じてくれて嬉しかったよ」

「もちろんわたしも誘われて嬉しかったけど、会社の人と食事会なんてこれまで一度もなかったの。会社の人たちはときどきしていたみたいだけど、そんなときわたしは参加していなかったから。突然参加するって言ったから、母はちよつとびくりしたみたいだけど、わたしが積極的になつて欲しいと両親は願っていたみたいなので、それ以上何も言わずに行つてらっしゃいと言うことになつたの。でもこの

次には同じ理由は使えないわね」

そう言つて聡子は笑つた。『この次』があると思つて
いるような言い方になつたことを聡子は少しだけ気
にした。

この日も、前回と同じように『山路』で食事して、
満彦の家でインスタントコーヒーを飲んで分かれた。
前回のような台所でのハプニングもなかつた。しか

し、次の週にも満彦からの食事に誘うメールが届いた。聡子は、会社の同僚との食事は理由にできなかったもので、カルテットのことで、集まってビオラのことを相談するからとやや本当らしい理由を言つて、朝家を出た。

食事は今回も『山路』だった。同じパターンで満彦の家でインスタントコーヒーを飲んだ。ケーキが

あつたのは一回目だけで、二回目からはコーヒーだけだった。満彦自身はあまりケーキは好きではなかつたらしい。この日聡子と満彦はソファーに並んで座つてコーヒーを飲んだ。そして満彦は聡子の肩に手を回してそつと抱き寄せた。聡子はされるがままにした。しばらくそうしていたが、満彦は聡子の顔に自分の顔を寄せて口づけをした。聡子も満彦の背に腕を回してそれに応じた。聡子は離婚以来初めて

の抱擁だった。聡子は高揚して、満彦に強く抱きついた。激しい口づけと愛撫が続き、二人はそのままソファーで行き着くところまで行ったのだった。

(十二)

二人が甘い時間を過ごしているちようどそのころ、聡子の家に瑛子から電話がかかっていた。

「聡子さんとカルテットを一緒にしている伊集院と申しますが、聡子さんいらつしやいますか？」

「聡子は、カルテットのこととでメンバーの集まりがあるから遅くなると言っていましたけど」

瑛子はとつさに頭を回転させた。最近サイファイルで聡子と満彦が話しているところを何度か見かけたことが思い出されたからだ。

「あつ、そうなんですけど、わたしは急用でいけな

くなつたので、相談の結果を何か聞こうかと思つて」と誤魔化した。

「では、聡子が戻りましたら伊集院さんからお電話があつたことを伝えておきます」
そう言つて、電話は終わった。

実は、瑛子はそのときビオラの候補が見つかったので、それについて相談しようとして聡子に電話したのだつた。瑛子は、『結果を何か聞く』にしては時

間が早すぎたなと思った。

いつもより高潮した表情で帰宅した聡子を見て、聡子の母親は敏感に頭を働かせて、聡子に今起こっていることを感づいた。

「おとなのあなたの行動を監視するつもりは全然ないけど、お母さんには本当のことを言っつてね」

聡子は、どうして母がそんなことを言い出したのか

はわからなかったが、自分がいましてきたことが体中にほてりとして残っていたので、それで母に気付かれたのかと思った。しかし、冷静に、

「どうしたの？」

と訊いた。母は、

「今日の集まりはどうでした？」

「どうって？ビオラがいなくなっただからこれからどうしようかって」

「皆さん集まられて？」

「ええ、どうして？」

「伊集院さんからお電話があつたの。あなたが帰つたら電話するつて言つとききましたよ」

聡子は観念した。それで満彦と親しくなつたことを話した。母親としては、聡子がこんどこそ幸せを掴んでくれたらと期待したが、満彦には妻子があり、単身赴任中であることを聞いて、聡子がまたも不幸

せを抱え込もうとしていることを、最近の明るい表情に喜んでいただけに、聡子のために悲しんだ。そして深入りしてしまいう前に別れるように忠告したのだった。

聡子は、自分が十五年前に味わったと同じ苦しみを、今度は自分が原因で満彦の奥さんに与えることを考えた。それでも単身赴任の間だけでも良いという身勝手な思いも頭の中に渦巻いて離れない。

聡子はカルテットに誘われ、それができるだけでも大変な幸せを感じてきた。そして満彦に愛されることはカルテットに勝るとも劣らない大きな喜びであつた。母が言うように傷口が大きくなならないうちに満彦と別れると言うことは、その両方をいっぺんに失うことである。またカルテットが始まる前の灰色の人生に戻ることを意味する。聡子は悩んだ。

このとき恋の渦中にいる聡子は、自分の心に長く

宿っていた、世の男性に対する不信感が、いまの満彦にも当てはまるはずなのに、満彦は違うと思つている自分の矛盾に気付いていなかつた。

また満彦からいつものように食事の誘いのメールが入っていた。聡子は夕食を誘われたことをこつそりと母に言った。母は満彦と会つたときに、今後のことをきちんと話し合うように重ねて忠告した。聡

子は曖昧に頷いただけで、出勤していった。

聡子はこの日一日中、満彦とどう向き合うか考え続けた。しかし考えは堂々巡りするだけで、何の結論もないまま、満彦と『山路』で向かい合った。満彦は、最近の聡子には見られなくなっていた暗い表情に気付いて、何か悩みでもあるのか訊いた。聡子は何でもないと言うだけであつた。そして、きょうは食事だけにしたいと告げた。

「それはかまわないけど、いったい何があつたのか話してくれない？」

聡子は意を決して、妻子ある満彦と付き合い始めたことを母に話したと言つた。そして母から、将来についてきちんと話し合うように忠告されていることも告げた。満彦は至極当然の忠告だと思つた。聡子の母親の言葉は、聡子によりも自分に言われているようにさえ思つた。『いつたいどうゆうつもりなの

だ』と迫られていると思つた。間違つたことをして
いることに対して、正しい意見を言われて、それに
反論することはできない。満彦には先のことを考え
た覚悟などなかつたのである。『じゃあ、別れようか』
と言つてしまえば、ことが大きくならずに終わらせ
ることはできるかも知れない。しかし、聡子が心か
ら自分を慕っているらしいと感じている満彦は、別
れるという言葉を簡単に口にできないと思つた。だ

からといって、何となく醒めた関係になつてゐる妻と別れて、聡子を選ぶという覚悟もまつたくなかつた。男女の関係だけは止めて、カルテットを続けるという選択肢はあるのだろうか。

「聡子さんへの気持ちは決していい加減なものじゃないけど、聡子さんの将来のこともあるから、お母さんが言われるように真剣に考えてみるよ」

満彦はそんなとりとめのない言葉しか出てこなかつ

た。聡子はカルテットも満彦も失いたくなかった。しかしそのための正しい方法と言うものはない。満彦を失わないためには、満彦がいまの家庭を捨てる決断をしてくれるしかない。なのに満彦はそのようなことを一言も口にしたことはない。聡子自身そこまでのことを強く望んでいるとは言えなかつた。

食事だけで帰るといった聡子だったが、誘われるままに寢室に伴われて、二人は激しく抱き合つたの

だった。

(十三)

聡子のところに瑛子からメールが入った。ビオラ候補が見つかったのだがそのことで相談したいと言う。いまの聡子は、それどころではななかったが、会うことにした。お互いの仕事帰りにドトールで落ち

合った。

「ビオラが見つかったって、誰のこと？」

「それより聡子、川上さんと何かわたしに隠していることない？」

「川上さん？」

「聡子の留守に電話したでしょ。あのお母さんの受け答えでピンときたの。お母さんには、わたしは、急用ができて行けなくなつたからって言った

けど、わたしが行かなかつたら、聡子と川上さんだけじゃない。わたしには連絡もなかつたということ
は、二人だけで示し合わせて会つたのでしよう」

「瑛子には隠しようもないわね。あするときだけでなくて、川上さんとは何回か二人で会つてるの。瑛子に隠そうと思つたわけじゃないけど、しばらくカルテットもトリオもなかつたし」

「深い関係になつたつてこと？」

「深いって言うか、でも別れることになるかもしれない」

聡子の表情が傍目にも急に暗くなつた。『これからのことを考えよう』と言って別れた先日のことかと思ひ出されたのだ。

「そうなつてもカルテットは続けられる？折角ピオラが見つかるかも知れないのに。でもむつかしいかな。楽しくできないよね。聡子がそんなことお構い

無しに突き進むような女ならいいのだけどね」

「ビオラって誰？サイフィルの人？」

「よそのオーケストラの人。由香が教えてくれたんだけど。連絡先も教えてくれたので聞いてみたらやってみたいって。家も市内だし。わたしたちより若い女の子だけど、由香の話では結構上手いらしいよ」

「お付き合いはやめてもカルテットは続けるのって、

おかしくない？」

「おかしくないでしょ。離婚した夫婦が同じ活動を続けていることだっただけなくさんあるわよ」

「喧嘩しているわけじゃないし、やってみようか」

聡子と瑛子がそんな話をしているとき満彦のところでは大変なことになっていた。満彦の妻梅子と二人の子供が週末にかけて来ていた。家族が着いた日

の夜、四人で『山路』で食事をした。満彦たちを見たマスターがあらうことか、お愛想のつもりか、
「いつもありがとうございます。今日のご家族でいいですね」

と言ったのだ。梅子が満彦に聞き返した。

「いつも来てるんだ」

それを聞いたマスターは、このような店のマスターとして決して口にしてはならないことを口にした。

「それはもう、カルテットの仲間と毎週のようにご利用いただいでるのですよ。つい二三日前もおいでいただいたばかりで」

マスターとしては満彦が上得意の常連さんであることを言いたかったのだろう。梅子はカルテットの仲間と聞いて、セクシーな瑛子を思い浮かべた。そして似たような派手な感じの由香のことも思い出した。二人は食器の片づけを手伝って台所まで入ってきた

ことがある。梅子は、満彦のカルテット仲間が三人とも女性であることは知っていたが聡子のイメージはそのときはつきりしなかった。

「へー、楽しそうね。きょうはこんなこぶつきですみませんね」

顔は笑っているが、明らかに面白くないと思っっていることが満彦にはわかった。

食事がすんで、家に帰っても子供たちは久しぶりの一家団欒に興奮してなかなか眠らなかつた。それでもやっと子供たちが眠ってから梅子はコーヒーを入れて、練習室でもある居間に来た。

「コーヒーなくなりかけてたわよ。明日買っておきましようね。カルテットのみなさんコーヒーよく飲まれるんだったら、インスタントでないのにしたら？ 『山路』に行くんだったらその必要ないか。あ

なたインスタントの方が好きだしね」

「いや、インスタント、入れるのも簡単だし、明日
ついでがあつたら買っておこう」

「マスターの話では、カルテット調子よくいつてる
みたいね。前お会いした人たちと同じメンバーで続
いているの？」

満彦は、梅子が何か言うための前置きを始めている
と思つた。満彦は、訊かれたことに答えて、このカ

ルテットは始まったときからビオラが定着しなくて、折角定着しかけた由香が結婚して抜けてしまったので、またビオラ探しが始まっていることを説明した。

「ビオラがいなくても練習には集まっていたのね」
「しばらくはね。だけどバイオリン二人とチェロの曲なんてあんまりないだろ。はじめはバッハの《ト
リオ・ソナタ》をやったりしたけど、そればかり
じゃね。ここのとこちよつと開店休業状態だよ」

満彦は墓穴を掘った。

「練習はしないけど、『山路』の食事会だけは続けて
いるってこと？」

満彦は自分の失言に気付いたが、すぐに言い訳はで
きなかつた。梅子の言葉が矢継ぎ早に返ってきた。
声が大きくなっている。

「どうも変だと思ったの。あなたはこれまでも何処
にいますときもオーケストラの仲間を集めて室内楽や

ってたけど、練習のたびに食事を一緒にしたりしな
かったわよね。食事なんて発表会の打ち上げのとき
だけじゃなかったかしら。それが、メンバーも欠け
てるのに食事会、ついには練習もないのに食事会つ
てどういうこと。あのセクシーな子がいるからね？」
満彦は、梅子の想像が聡子に向いていないことで少
し安心した。

「セクシーな子、セクシーな子って、伊集院て言う

人のこと言ってるんだと思うけど、関係ないよ。ビ
オラの人をどうやって探すかとか相談もあつたし
ね」

「じゃあ、これは何？」

そう言つて梅子はティッシュに包んだものを広げて
見せた。細くて長い髪の毛一本だった。

「それ何だ？」

「きょう来てから、寢室を片づけようと思つて入っ

たときにベッドで見つけたの」

「お前のだろ」

「三か月以上前のがそのままあるって言うつもり？ それにわたしは以前から少し染めてるのに、これはまったく染めてないのよ。あの子が染めてたかどうか覚えてないけど、観念して本当のこと言ったらどうなの」

頬を赤からめて怒ったときの梅子の引き締まった顔

は美人だと満彦は思った。満彦はこれまでたくさん
の音楽仲間と、男女を問わず親しくしてきた。それ
らの中には魅力的な女性も少なからずいたし、その
ような女性に対して満彦が好感を持つことがあるの
は梅子も知っていた。しかしそれが深い関係にまで
発展することはなかった、と梅子は信じていた。

音楽仲間同士の集まりはいつもオープンだった。
ところが、単身赴任は今度が初めてだった。梅子は、

子供の学校のことはあつたが、折角家族が住めるほどの広い家が会社から与えられたのに失敗したと思つた。

「やつぱりあのセクシーな子なのね」

梅子は確信があるように言つた。

「ちがうよ」

「じゃ、もう一人のかわいい子？」

「それは山根さんと言ってビオラで、結婚して遠く

に行ってしまったって言っただろ」

「じゃ、あとは背が高いダサイ子しかいないじゃないの」

満彦は聡子のために弁護したかったが、できなかつた。

「まあ、あの子なら口説けると思ったのね。いやらしい」

梅子は、満彦の浮気の相手が自分より魅力的な女で

はないことに不思議な怒りを覚えた。自分と言う存在があるにもかかわらず、どうしてもあんな女に惹かれたりするののかと言う腹立ちだった。もちろん相手の女が瑛子のように自分より魅力的だったらさらに腹が立っただらう。

「そんないいかげんなことじゃないよ」

「じゃ、真剣って言うこと？それってどういうこと？家族を捨ててその子と一緒にいるって言う

の？」

「そんなことまで言っていないだろ」

「じゃ、どういふことなの」

「……」

相手が誰であれ、自分のベッドで別の女が満彦と睦みあつたと思うと、梅子は気が狂いそうに腹が立つてきた。気丈な梅子は泣き崩れたりはしなかつたが、大粒の涙をポロポロと流しながら、手元にあつた新

聞を満彦に投げつけた。

「わたし明日帰る。あなたがどうするのかちやんと決めてから話をしましょう」

その夜梅子は毛布にくるまっつて居間で寝た。

(十四)

聡子と満彦は男女の関係を清算した。満彦が梅子

に謝つて、一応家族が形の上で落ち着くまでに一月かかった。もちろん満彦と梅子の間の冷たいしこりはさらに長い年月残つた。

梅子は、満彦の単身赴任を解消する行動は起こさなかつた。そうするには、さらに時間が必要だつたのだらう。

梅子が認めたわけではなかつたが、新しいビオラを入れてカルテットは続けることになつた。新しい

ビオラの女性は若いのに室内楽が好きらしく四重奏の経験もかなりあるようだった。

聡子と満彦はカルテットの練習会やサイファイルで顔を合わすたびに気まずい思いをしたが、二人ともサイファイルもカルテットも辞めるという選択をしなかった。その気まずさも時間とともに薄らいでいった。初めのうちは二人が言葉を交わすことはほとんどなかったが、瑛子が上手く場を取り持つことで、

カルテットとしては順調に進んだ。

新しいビオラが入ってからおよそ一年後にあつたサイフィルの団内アンサンブル大会に、このサイフィルのメンバーではない新しいビオラも特別参加して、満彦たちはベートーヴェンの《弦楽四重奏曲、第四番》の第一楽章を演奏した。

事件以後は、満彦たちカルテットのメンバーも満

彦自身も『山路』で食事をするとはなかった。

(完)

*この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 ≪お蓮・勘兵衛 悲恋の墓≫

第二話 ≪緑のトンネルで≫

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットの風景

「オセロ」く手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

String Fiction Series 04

トリオ・ソナタ

2022年10月30日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

<https://www.ac-illustr.com/>

・タイトル：弦楽器グラデーション

作者：t-dunさん

イラストのID：2610321

・タイトル：花のフレーム2(黒)

作者：猫エンジンさん

イラストのID：1587380

<https://www.silhouette-ac.com>

・タイトル：譜面台

素材のID：105365

・タイトル：譜面台

素材のID：105366

<https://www.photo-ac.com>

・タイトル：チェロ

作者：r*****mさん

写真のID：3669919

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
